

## 火売町の民俗行事

別府市朝日地区

はじめに

地域住民がみんなで参加し支えてきた、お祭りや踊りは、昔から人々がお互いの親睦を深め結束を固めるための一つのいとなみでした。科学が進み生活の水準が高まり、いろいろの地域の人々がいっしょに暮らすようになると、伝統的な行事はしだいに廃すたれてきました。火売町で続けられているお祭りや盆踊りは、今では珍しい民俗行事となりつつあります。

以下は、火売町内に昔から言い伝えられた故事にもとづく行事であります。永い間には、昔を知る古老や資料も少なくなり憂慮しております。今後有識者の調査研究により、さらに正確な資料の出現を期待しています。

「大将軍祭」・一月十三日



高橋憲二

昔から一月十三日を「牛馬の日」といって農家では、牛馬を含む家畜の正月祝いの行事があります。

町内では古くから町内の影之木あたりに安置してある石祠の前で、神官のお祓はらいの後座前なまの家で直会なおらいをして牛馬の安全を祈ってきました。

昔は、牛馬の神様として有名な挾間町篠原の「馬頭観音」を祭る「松原神社（大将軍）」に代参をたて参詣し

てもらい、頼まれて持ち帰った餅と笹ささを各戸に配り神棚に供え、お札は竹筒にいれて牛馬の耳にくくりつけたことが言い伝えられています。

#### 「祖母嶽祭」・八月四日

当町内には毎年八月四日、「祖母様（祖母嶽様）」と呼ばれ、農家の人々が集まり風害を防ぐために、風の神祭の行事をする習慣があります。

県の南境に聳えたつ祖母嶽には、古来、神武天皇の祖母にあたる豊玉姫とよたまをお祀りしてありますが、これに合祀してある風の神が「級津彦神と級長姫神」の二神であります。祖母様とはこれら「祖母嶽大明神」の略称で、祖母嶽祭とは、台風鎮めを祈願するため、風の神にお詣りする行事であります。

この風の神祭りが当地の記録にあらわれたのは、江戸時代の文政十二年（一八二九）ころに、北中の大庄屋「直江家」に伝わっていた「直江文書」に見えるのが初めてであります。これは神明祭より二〇年後に当り、翌年天保に改元して、「天保の飢饉」が始まる直前であり

ます。この「直江文書」によると、鶴見郷千石の農民や他の住民が一体となり、大平山（扇山）の中腹で風鎮めと五穀豊穡を祈願しましたが、そこには「虎御前の松」と呼ばれる一本の老木があり、その根元に何ヶ所かの風穴があつて、大きな音をたてていました。そしてその穴には「八大竜王の伝説」もあつて、雨乞の祈願も行なつたうえ、山頂まで登つたということです。

「大平山の雨乞」については、『鶴見七湯廻ななゆまわり記』に、（弘化二年）「大平山雪あまこいのこと」として次のように書かれています。

此山は鶴見山の前にありて麓より登ること凡そ二十餘町ほど、すべて石もなき艸山くさにして峯には平らかなる所二反歩もあり。この所鶴見山の神靈たる地獄とさし向ひたり。爰こゝにいにしへより八大龍王の石躰と祭り来れる立石あり。早魃あまこいのとしになて雩手をつくしても其しるしなきとき、此山に登り雨を祈るときには、土もさけ真金も舞るとかいへる如く照はたらきたる夏の日にも、忽たちまち大雨降こと其例掲き事なり。其雩の古例たる事也。

先ず其日の前日大宮司家に雩のことを云い入れ侍れば、鶴見社頭に古例の式ありて、幣帛供物をととのへ備へ当日未明より祈念あり。鶴見の村長兩人并村役のものらみな禮服して是も未明より參籠す。百姓中は家別に男はみな參詣してのち、また一同して石垣村の海濱にくだりて潮をくみ小竹筒式ツに入れもて帰り、ひとつは社頭に奉りひとつは大平山の八大龍王に捧げ侍る也。尤大宮司はじめ村役のもの百姓ども黄昏に山の麓に揃ひて、まず一番に雩の幟を立太鼓をうちならし竹貝を吹立、人々手毎に明松を燃し連ねて原中村・北中村兩列に行を乱さず押登りて山の頂に至り、八大龍王の石躰はた神山の地獄のかたに向ひしばらく大宮司修法あり。尤此日朝より健なる百姓五十人ばかりに燒草をもたせ山上にのぼせ終日火をたく事也。此峯にむかしより松木あまたあるといへども、常は禁じて枝葉をも取らず此日この為に取大いに焚く事也。また手毎に燃し連らねし明松を皆此火に投入れて空もこがる、ばかりの火を立て、登山の人々山も震動するほど声をあげ躍りさわぐ事也。是雨を呼ぶ為也といひ傳ふ。

かくこの雨乞をなすことに昔より雨降ざる事なしとかや、既ことし弘化二年の度、初夏の頃より雨少にして入梅になれども、潤雨なくして早苗かれがれとなりて、早乙女も手を空しくして田を植ること成がたし。依て五月望の日に此大平雩を取行ひしに、みなみないまだ山上にありけるうち、忽神嶺より黒雲起るかと思ふが中に大雨篠をつくがごとく降きたりて、みなしとどに濡れそぼちて家に帰りけるとかや。夫より日に日に入梅雨ふりつづきて、日あらず千町の田の面積わたして足穂の秋を待事となれり。

此の大平山は日出・杵築・府内の城下はた鶴崎・佐賀の関辺り五里十里の外よりも、雲井の空に遙に見へわたり侍れば、早魃の夏には最早鶴見の火焚雩近きにあるべし。是を待て田を植べしとて遠近の人みな日に待侍ること也けり。これ此國の鎮めとも成給ふ鶴見山の靈驗たる事あふぐべし。尊むべし。」

八月四日の当日は、火男火売神社の宮司が被川（春木川）で禊を行ない身を清め、氏子たちは当日一家に一人が出て、早朝より石垣の浜（上人ヶ浜）で竹筒に潮汲み

をし海藻で蓋をしたうえ、山に登り大平山（扇山）の風穴に投げ入れて祈願し、下山の後神社に泊まって直会をしてお互いの結束を固めたということです。

これと似た行事は、近年まで当地のいくつかの町内にも伝わっていました。ただし八月とは限らなかつたようです。

火売町の現在の祖母嶽祭りは略式であります。当日は火男火売神社で神官によりお祓いをうけ、扇山に向かって祈願をしたのち直会をしました。当初から相互の親睦を深め、結束を固める目的もあり、平成十年度で一六九年の年月を経た今、末長く続けてほしい良い民俗行事であるといえます。

### 「火防ぎ踊」（盆踊り大会）・八月二十四日

古文書の「三代実録」によると、その昔鶴見岳は度々噴火をくり返し、ふもとの住民に多大の災害をもたらしました。とくに、平安時代の貞観九年（八六七）正月二十日に、記録に残る激しい大爆発がありました。

このことを伝え聞いた朝廷の勅令により、当時、当地



の有力者であり「火男火売神社」の別当職であった鶴見三郎之介貞澄が、神仏合体時代のしきたりに則り九人の山伏に命じ、この地において「大般若経」を転読させ、火伏の儀の法力により、火山の神である火男火売（女）の二神の怒りを鎮め、さしもの大噴火も治まったという所です。

そこで神官や僧侶と住民が喜びのあまり踊ったのが、当地の盆踊りの始まりといわれます。現在の八月二十四日が、丁度これにあたり、平成十年度で、一一三一年の昔のことになります。この踊りは、いつ頃からか地元

人々からは、火を防ぐ「火防ぎの踊り」と呼ばれ、いろいろな長い歴史の経過とともに現在はその名前だけが「火防ぎ様」の信仰とともに残り、明治中期以降大分県下では珍しい民俗的な伝統行事となっております。

祭壇にお祀りしている「火防ぎ様」の金箔の木造は、当地で長い間いだに亡くなられた方々の霊を現し、毎年当番にあたった方々の手により大切に安置され、盆踊り大会の当日祭壇にお迎えしてお参りの方にはお接待をしております。なおこの木像は、大正十三年（一九二四）旧七月二十四日、当地の有志の方々の手により、改めて建立しなおされたものであります。

「神明祭」・七月一五日、一二月一五日

この祭は、遠く江戸時代後期の文化六年（一八〇九）に、近畿の滋賀の国より神明の神の分霊をお迎えし、火男火売神社の境内社としてお祀りしました。この神様は先祖たちが悩まれていた自然の五つの災害（旱魃・水害・風害・虫害・悪疫）を封じ、広くこの世で生を受けた者への安全と幸福を祈ったのが始まりといわれ、今年まで

一八九年間当地の人々によって受け継がれてきた伝統的な民俗行事であります。

当日は神明社と天満社の前で神官のお祓の後、自然の災害を封じるとともにこの世に生を享けた子供たちの健全やかな成長を祈ってきました。

町内において一一〇〇年以上の歴史を誇る「火男火売神社」は、例年十月十七日から十八日にわたって秋の大神祭を行なっておりますが、来年は、一一五〇年祭も計画されています。これについては後日あらためて述べることにいたします。

注

・お祭は、宮座や氏子が年毎に順番で受け持つ習わしがありました。頭（当）屋制といえます。本来のお祭は、頭屋になった家が神様をお招きしてお祭を主宰しました。火売町の「火防ぎ様」のお祭は、別府では古いかたちで今まで残っている貴重なお祭です。

・神明様はお伊勢様（伊勢神宮）です。